

終戦記念日を伝えること —一人の教え子からの報告から—

校長 齋藤幸之介

今年の8月15日・終戦記念日は、77回目を迎えます。例年、夏休み中でもあるこの日を子供たちにどうやって伝えようか、と悩んでまいりました。

そんな折、一通の封筒が我が家に届きました。毎日新聞2022年4月24日朝刊でした。

一人の教え子の取組

1面に福島宏希さんという一人の青年が取り上げられていました。私は福島さんに初任の学校で出会いました。私が受け持った3回目の卒業生の一人でした。笑顔を絶やさない子でした。多くを受け入れる柔軟性をもち、友達の考えを多くの場面で「いいね!」と認めていた姿を思い出します。

福島さんには、今から20年ほど前、私が担任をしていたクラスに、今で言う「エネルギー・ミックス」、我が国の電力を安定供給させるために様々な発電方法をそれぞれのくらいの割合で活用したらよいか、を学習した際に講師として参加してもらったことがありました。すでに小学生時代から有していた追究意欲は青年になってさらに向上し、次の世代に影響を与えてくれました。笑顔で子供たちに接する福島さんの姿に思わず目頭が熱くなりました。

記事の中にありますが、福島さんは「戦争から何を学び、今に生かすべきなのかをはっきりと答えられない」自身に気付き、「戦争を体系だてて説明するサイトを作りたい」と思い立ってブログを一人で開設したそうです。市民団体「history for peace」も設立しています。さらに、先の戦争で被害を受けた民間の人々が補償を受けられないことを知り、救済法案を成立させるための支援も行っています。活動を一層活発に行うために、正社員を辞してアルバイトで生計を立てている、とも紹介されています。

「さざ波」を起こす

福島さんは、自身が関わっている救済法

案が立法化される困難さを感じながら、次のように言っています。

「さざ波でいいから起こしたい」。

福島さんは、「理不尽なことを放っておく社会」に疑問を感じながらも、「うねり」、つまり大きな波を起こす難しさを実感しています。共に活動をしている仲間が離れてしまったこともあるそうです。

だからこそ、福島さんは「弱い風が吹くときにできる小さな波」を大切にしています。そして、さざ波が集まればいずれ、と諦めずに活動している、と私は教え子の気持ちを勝手に想像しています。

学校でも

現在ならば大いに批判を受けるでしょうが、私は以前「戦時中の食事体験」と称し、かつて疎開をしていた子供たちが食べていたであろう一食を調べて再現をしたことがあります。あまりの量の少なさに「ひもじい」というつぶやきが聞こえ、それからしばらくして涙を流す姿も見られました。

例えば年が明けた頃、6年生は社会科で第二次世界大戦を学びます。わずかな時間で子供たちが戦争についてどれだけ理解を深められるのか、とも思いますが、当時の国民生活の窮状を中心に追究します。

昨年度末、私は絵本「焼けあとのちかい」（文：半藤一利、絵：塚本やすし、大月書店）を全校朝会で読みました。子供たちの心にどれだけ残っているのでしょうか。

このように、手前味噌にもなりますが、学校では様々な学習活動を通して子供たちが戦争について考える場を設けています。

今日、私は夏休み前の最後の日に、全校に8月15日のことを伝えます。わずかな時間ですが、このことがきっかけになって終戦記念日を迎えてもらえたらと思っています。さざ波にもならないかな、と自身の中で苦笑いしつつ、私は改めて福島さんとの出会いに感謝したいと思っています。